

19	安城	安城東部小学校	タカノ ツバサ ----- 高野 翼
分科会番号	20	分科会名	総合学習

研究題目

**「なぜ」という問題意識をもち、協働的に学び続けようとする児童の育成  
～4年総合的な学習の時間「SDGs 未来につなごうプロジェクト」の実践を通して～**

研究要項

1 主題設定の理由

本学級の児童は、学校生活をよりよくしたいという思いをもち、その思いを相手に伝えることができる児童が多い。帰りの会では、学級で困っている問題や悩みを「こうしてほしい」と伝える様子が見られる。また、学級での係や当番活動では、多くの児童が声かけをして、学級内での活動をよりよくしようとする様子が見られる。学級活動に取り組むなかで今何が必要なのかを考え、行動に移すことができる。

しかし、学級の状況や自分の思いを相手に伝えることはできるが、伝えることで満足してしまい学級の現状をよりよくしていく活動を継続的に行うことができない。また、自分だけでは乗り越えられない問題に直面したときに、他者に頼ることができず、あきらめてしまう児童がいる。自分の力で乗り越えることができない課題に直面することは他者と協力して解決するチャンスであり、難しい課題に他者と協力して立ち向かうことで自分では見つけることのできなかつた考えや新たな視点から物事を考えることができる。

そのため、本単元では、課題を解決するために継続的に取り組む力や、自分一人だけでなく他者と協働する活動を通して、自分の意見を伝え、相手の考えを理解し、協働的に学ぼうとする力を培ってほしいと考えた。

また、児童の身の周りの日常的な出来事の中にも、「なぜ」という問題意識につながる出来事がある。疑問に思うことを探究し、その中から自分たちにできることを見つけ、新たな発見につながることもある。自分の生活を振り返り、疑問や問題点を見つけることも自分にできることを考えるために必要なことであると考えた。そこで、社会科「わたしたちのくらしとごみ」の学習と関連させ、身近な地域でSDGs活動に目を向けている企業に出向く。そして、もっと地域に協力をしたいという思いを育みながら、自分たちにもできるSDGs活動（エコプロジェクト）がないかを考えていく。この活動を通して、授業だけでなく、普段の生活の中から疑問をもち、もった疑問を解決するために自分にできることを考え、身の周りの生活をよりよくしたいと行動できる児童を育てていきたいと考えた。

2 目指す児童の姿

主題を受けて、本研究で目指す児童の姿を次のように設定した。

- 人とのつながりを大切にし、協働的に学ぼうとする児童
- 「なぜ」という問題意識をもち、自ら探究し続けることができる児童

3 研究の方法

(1) 研究の仮説と手立て

主題に迫るために、次のような仮説を立てて、研究を進めることにした。

<仮説1> 問題解決に向けて協働的に話し合う経験を積み重ねていけば、自分の思いをはっきり表現し、伝えようとする意欲が高まるとともに、生活上の問題に気付き、課題解決に向けて協働的に学ぼうとするだろう。

<仮説1の手立て>

- ① 友達との意見交流の場を効果的に設定することで、多面的・多角的に物事をとらえ、他者と協力しながら活動を行うことができるようにする。
- ② 自分たちにできることを協働的に考える場を設定することで、同じ課題の子同士でグループ編成を行い、グループでPDCAサイクルを実践することできるようにする。

<仮説2> 探究活動の過程に SDGs に関する安城市の取り組みを知る場や地域の企業に調査に出かける機会を作ることで、「なぜ」という問題意識を始点に、「なぜ」を追究する学習に継続的に取り組むだろう。

<仮説2の手立て>

- ③ 「なぜ」という問題意識からゲストティーチャーを招き、様々な環境問題の現状について学ぶことで、その問題を自分事としてとらえ、環境問題を主体的・探究的に考え続けられるようにする。
- ④ 「なぜ」という問題意識から地域の企業の SDGs に関する取り組みを調査することで、地域での SDGs 活動を知り、その問題を解決するための地域の人々の思いに気付くことができるようにする。
- ⑤ SDGs に関する調べ学習や地域の企業調査によって出た「なぜ」という問題意識や「もっと」という主体性を振り返るために学びの足跡を掲示し、常に自分たちが抱える課題を確認することができるようにする。

## (2) 仮説の検証方法

本実践では、抽出児童Aの変容について、活動の様子やワークシートの記述等から、仮説を検証していく。

抽出児童A(以下、児童Aと示す)は、学校生活の中で友達と関わり活発に過ごす姿が多く見られる。しかし、学級をこうしたいという思いが強く、自分の考えを伝える中で友達と衝突してしまうことがある。学習では、興味あることに関して意欲的に取り組み、授業中の発言もとても多い。今まで習ってきた学習を生かして、次の学習に取り組む姿勢も見られる。しかし、新しいことに興味をもって取り組むことはできるが、一つの問題が解決するとそこで満足してしまい、次にこうしたいという思いをもつことができていない。

そこで、探究活動の過程に地域の人や友達と関わる活動を取り入れることで、自分の思いだけで物事を考えるのではなく様々な考えや思いを取り入れながら行動できるようになってほしいと考えた。そして、自分の思いを伝えるだけではなく友達の見解を活動に取り入れることで活動がよりよくなることを感じ、実践に協働的に取り組む姿を願っている。

## 4 実践と考察

### ア協働的に学び、他者の考えを取り入れるための手立て

#### (1) 自分たちの生活を見つめなおそう

1学期には、環境についての調べ学習や安城市ケンサチ SDGs 課の講座、地域の企業に調査に出かけるなどを通して自分の家でできるエコ活動を考えた。それを夏休み中に、各自での SDGs の目標を達成するための活動に取り組んだ。そして、夏休み後に、取り組んだ活動内容や活動の成果を発表する時間を設定した。自分の活動を振り返ること、他者の活動を聞いて、今後の SDGs に関する活動の視野を広げていくことを目的として行った(手立て①)。

児童Aは、① unnecessaryな電気はつけない②ごみを分別する③エアコンが効きすぎているときは、ドアをしめる④食べ物を残さない、という4つのエコ活動に取り組んだ。もともと SDGs は難しいものであると考えていた児童Aだが、実際に家でできる SDGs 活動に取り組んだことで、普段の生活の中で自分ができることはたくさんあることに気付いた。さらに活動ができたかどうか毎日記録することで、自然と SDGs に対する思いを強めることができた(資料1下線部)。また、学級全体で活動を発表することで、自分とは違う視点をもつ節電や残飯を減らす活動に目を向け、新たな発見をすることができた(資料2)。

児童たちは、一部の活動に偏ることなく、様々な視点からの活動を共有することができた。SDGs 活動を実践する導入として、他者と意見を交流することで視点を大きく広げることができたと考える。

1. エコアップ行動を記録しよう (環境のために自分のできることを考えてみよう)

できた日付の できなかった日付	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目
① unnecessaryな電気はつけない	○	○	○	○	○	○	○
② ごみを分別する	○	○	○	○	○	○	○
③ エアコンが効きすぎているときは、ドアをしめる	○	○	○	○	○	○	○
④ 食べ物を残さない	○	○	○	○	○	○	○

ふりかえり  
 リンゴが食べきれなくて、自分がかけてきたSDGsが、  
 リンゴが食べきれなくて、自分がかけてきたSDGsが、  
 リンゴが食べきれなくて、自分がかけてきたSDGsが、

資料1 児童Aが挑戦した家での SDGs 活動

2. エコ発表 (1人1つと発表した活動をメモしてあげよう)

1. 電気はつけっぱなしにしない	2. エアコンの温度を26度以上に設定する
3. 食べ物を残さない	4. 水は蛇口を絞って使う
5. 紙くずは紙くず箱に入れる	6. 古紙は古紙箱に入れる
7. 古雑誌は古雑誌箱に入れる	8. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
9. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	10. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
11. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	12. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
13. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	14. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
15. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	16. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
17. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	18. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる
19. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる	20. 古おもちゃは古おもちゃ箱に入れる

資料2 発表会のワークシート

## (2) 自分たちで実践してみよう

児童は興味のある SDGs 番号を選び、目標達成のために自分にできることを考えた。そこで同じ課題の児童同士でグループ編成し、SDGs の課題番号「6 番節水チーム」「7 番節電チーム」「1 2 番食品ロスチーム」「1 4 番ごみ削減チーム①②」「1 2 番再利用チーム」の合計 6 チームに分かれてチームごとに SDGs の課題目標に向けた活動を行った（資料 3）（手立て②）。

チーム名	活動目標
節水チーム	節水を心がける
節電チーム	電気の大切さを伝える
食品ロスチーム	給食を残す人を減らす
ごみ削減チーム①	ごみを減らす
ごみ削減チーム②	ごみを減らす
再利用チーム	ごみを再利用する

資料 3 各チームの活動目標

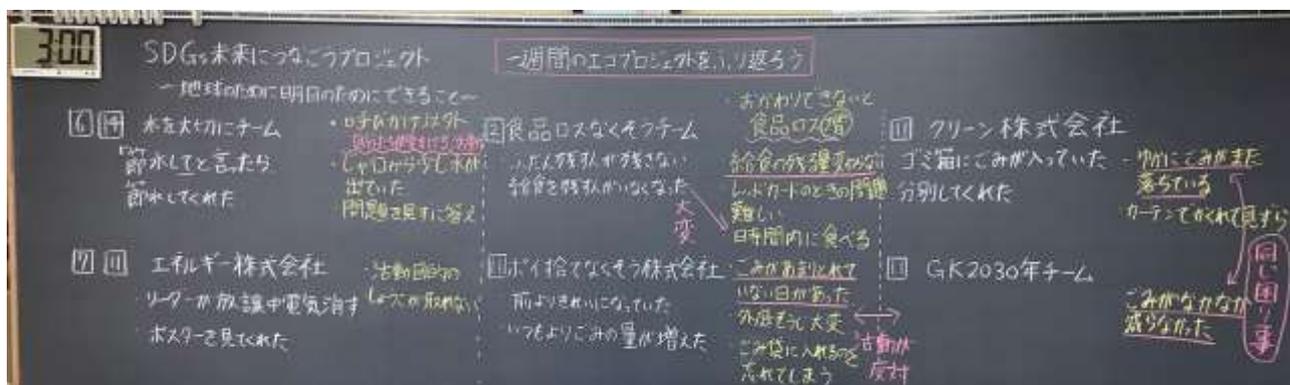
活動を行う前に学級全体で実践の活動を紹介し合う時間を設けた（手立て①）。目的は、自分たちの活動を再確認するとともに他チームの活動内容を知り、自分たち以外のチームの活動にも協力するためである。児童 A のチームは学級でごみ拾い大会を開き、学校のごみを減らすという活動目標を立てた。ごみ拾い大会をするという児童 A のチームの発表に対し他チームからそうじする場所ごとにごみがとれる量が違うので不公平になるのではという質問が出た。児童 A のチームはごみの取れる量の平均まで考えることができていなかったため、質問にすぐに答えることができなかった。しかし、他チームからの質問により、自分たちのチームの話し合いだけでは気づくことができなかった新たな視点に気付くことができた。また、話し合いの中で、他のチームからのアドバイスを参考にしようとしている場面が見られることから、多面的・多角的に考えられる場になったと言える。（資料 4）



資料 4 児童 A のチームが発表をしている様子

## (3) 実践後の困りごとの解決策を考えよう

各チームで、1 週間のエコプロジェクトの活動を振り返る時間を設けた（手立て②）。活動の結果をもとに、「うまくいったこと」「困ったこと」に分けてエコプロジェクトの活動を振り返った。チームで振り返ったことを学級全体で共有し、「うまくいったこと（白チョーク）」「困ったこと（黄チョーク）」「共通した考え・思い（赤チョーク）」に分けて板書すると、児童から「同じ困りごとがあるよ」「活動を行うためには自分たちのチームだけではなく、ほかのチームの人たちの助けもほしい」という意見が出た（資料 5）。



資料 5 「一週間のエコプロジェクトを振り返ろう」の板書

そこで、困りごとを解決するために学級全員でどのようにしていく必要があるかを考える時間を設定した（手立て①）。その際に、困りごとを抱えているチームの活動をしてみてどのように感じたかと問いかけることで、客観的な視点からの意見を出し、活動をしている側からでは見えない視点からの意見をもらい、新たな改善策や問題点を生み出すことができるようにした。

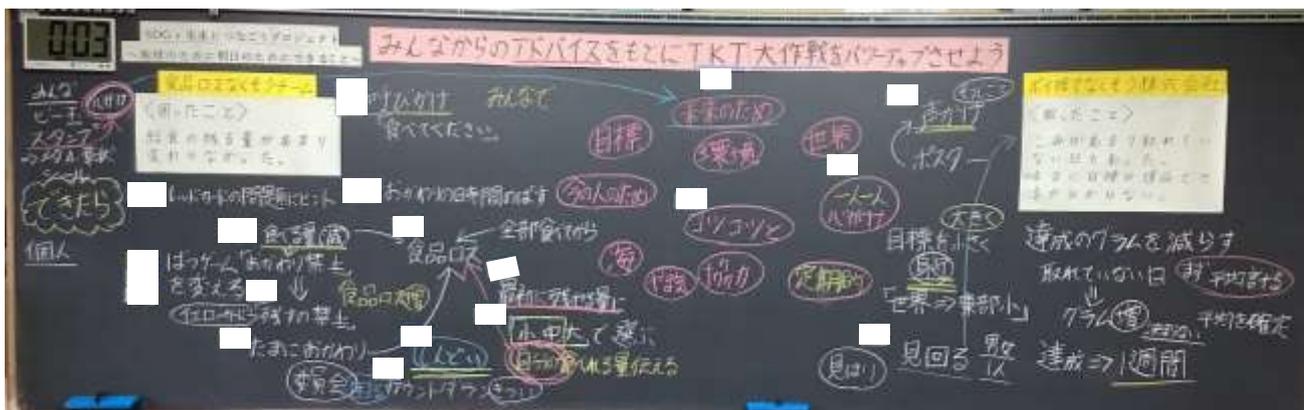
また、アドバイスカードを記入し、自分たちのチームやほかのチームからアドバイスをもらえる時間を設定することで他者との思いを共有できるようにした（手立て①）。児童Aのチームはごみがあまりとれていない日があったという困りごとを発表した。友達のアドバイスカードにはごみが落ちていないか見回りをすればいいのではという意見があった。そのアドバイスを聞いて、児童Aは他者と協働する中でよりよい活動ができると考え、自分たちのSDGsの活動目標の原点に戻り、活動内容を見直すきっかけになった（資料6・7下線部）。よって、アドバイスカードをもとにした話し合いは他者との思いを共有するために効果的な手段であったといえる。（資料8）また、見回りをする際に各そうじ場所ごとのどこにごみがたまりやすいのかを確認することで、ごみを少しでも減らそうとする児童Aの姿も見られた。

自分たちでは、上手くできたと思っていても、活動を行っている側、私たち以外の人は困っていることがあって、それを私たちは気づいていませんでした。だから、周りの人たちの思っていることも聞けて、活動に活かしていきたいなと思いました。

資料6 他者の考えを取り入れようとする際の

見回るという案は、出ていたけど、今日ではどうやったらもっと上手くいくか、他にいい案はないかとみんながたくさん意見や案を出してくれて、企画が前よりもさらに良くなった気がしています。なので、また私たちの班で、みんなの案をたよりに話し合おうと、以前より、私たちの目標達成、SDGsの目標達成に近づけると思っています。

（資料7）「アドバイスをもらった際の児童Aの振



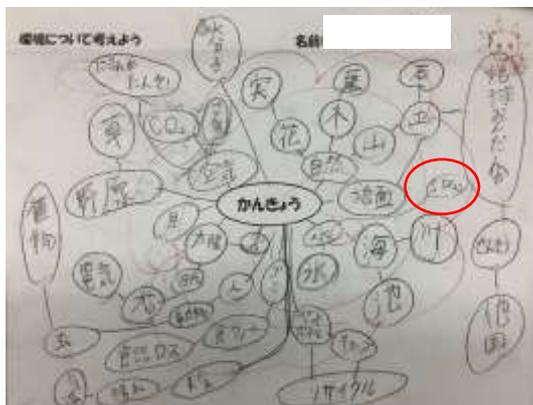
資料8 友達のアドバイスをもとに活動をパワーアップさせよう」の板書

### イ「なぜ」という問題意識を追究するための手立て

#### （4）ゲストティーチャーを招く

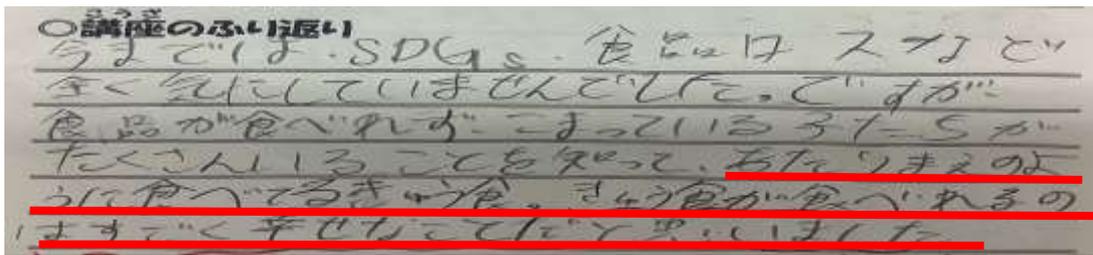
1学期の導入では、社会科「わたしたちのくらしとごみ」「いつでも使える水」の学習と関連させ、環境について知っていることをウェビングマップを活用して確認した。児童Aはこの段階でSDGsという言葉がテレビ番組やスーパーなどで見かけ、知ってはいるものの、実際にSDGsが何なのかを理解していなかった（資料9）。

また、なぜSDGsという言葉が目にする機会が多いのか疑問に感じていた。そこで、SDGsとは何かを理解し、そこから環境のために主体的に活動に取り組むことができようになりたいと考え、安城市ケンサチSDGs課の講座でゲストティーチャーを招いた（手立て③）。ケンサチSDGs課の講座では、SDGsの意味や17の達成目標、SDGsの目的が貧困を終わらせ、地球環境を守り、すべての人々が平和と豊かさを享受できる世界を実現することであることを知った。児童Aは講座を受ける前は、環境問題を自分自身の問題として考えることができていなかった。しかし、地元安城市のケンサチSDGs課が環境を守るた



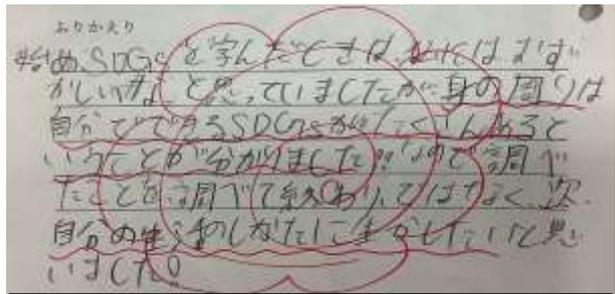
資料9 環境についてのウェビングマップ

めに取り組んでいる活動を知ること、今まで調べてきた環境問題を自分事として考えるようになった。ワークシートの記述にあるように、「当たり前のように食べている給食が食べられるのはすごく幸せなこと」とであるととらえ、SDGsに関する問題が他人事でないことに気づいた（資料10下線部）。



資料10 児童Aが講座後に書いた振り返り

また、講座後の調べ学習では、自分が興味をもったSDGsの達成目標について進んで調べることができた。調べるだけでなく、調べた問題を自分事としてとらえ、自分の生活に生かしたいと考えてワークシートに記入することができた（資料11下線部）。このことから、ゲストティーチャーを招き、地元安城市のSDGsに関する取り組みの事例について知ること、自分のやりたいことを主体的に選ぶきっかけづくりとなったと言える。



資料11 児童Aが講座後の調べ学習で書いた振り返り

#### (5) 地域の企業が取り組むSDGs活動の調査

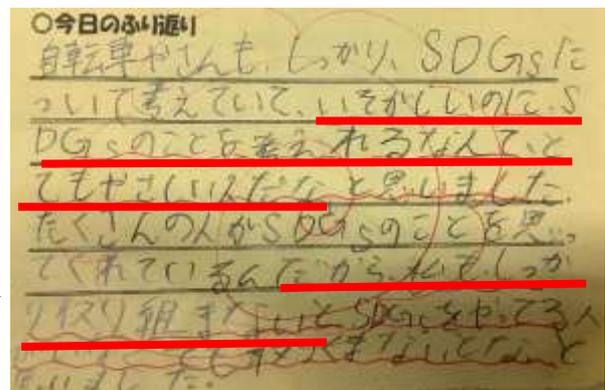
児童たちは、安城市でSDGs活動が行われていることを知り、東部学区でもSDGs活動に取り組んでいる企業があるのか疑問に感じた。そこで地域の環境問題に目を向けた子どもたちに、企業でどのような取り組みをしているのか調査に出かける場を設けた（手立て④）。クロネコサイクルでは不要な自転車の無料回収をして、再生した自転車を販売している。また同時に、体調によっては毎日通えない人や病気で障害が残ってしまった人たちが働けるような工夫にも取り組んでいる。部品を固定したり、作業台を改良したりすることで、自分に合った作業を探していけるといった、多様な働き方の時代にあった就労継続支援を実施している。そこで児童Aは「なぜこの会社はSDGsに取り組んでいるのか」と質問をし、人のために何かをしたいという地域の人々の思いを知ることができた（資料12）。



資料12 質問する児童Aの様子

そして、地域の人々の思いを知ること、「自分たちにできることは何だろうか」、「何かできることをやってみよう」という思いを高めることができた（資料13下線部）。

東部学区では自転車をリサイクルする企業以外にもSDGsに取り組んでいる企業があるのか疑問に思う児童がいた。そこで、様々な企業が取り組むSDGs活動を自分たちが取り組む活動に生かしてほしいと考え、活動の選択肢を増やすために他の企業を調査する場を設けた（手立て④）。大見工業での調査では、再利用しやすい切削工具づくりやいらぬ部品をリサイクルするためにごみを細かく分別していることを知った。オノウチ精工では、年間5回会社周りのごみ拾いを行っていることや、グリーンカーテンを利用した日よげができる

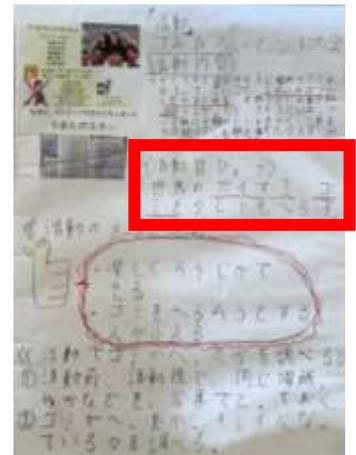


資料13 企業訪問後の児童Aの振り返り

ことを知った。今回の企業調査を通して、地域の企業での SDGs への取り組みを知るだけでなく、なぜ取り組むのかという理由や働く人の思いにまで考えを広げることができた。

## (6) 学びの足跡の掲示

活動を実践していく中で、SDGs の目標達成とは離れた活動をしてしまうチームや他のチームの活動に参加できていない児童が出てきた。そこで各チームの活動内容と活動目標をまとめたものを学びの足跡として掲示した(手立て⑤)。自分たちが最初に掲げた「なぜ活動に取り組むのか」という思いを目に見えるようにすることで、自分たちの SDGs の活動目標の原点に戻り、活動内容を見直すきっかけにすることができた。また自分たちのチームだけではなく、他のチームの活動内容と活動目標を可視化することで、他のチームのために自分には何ができるか考えることができるようになった(資料15)。



## 5 仮説の検証

### (1) 仮説1について

手立て①「友達との意見交流の場を効果的に設定し、多面的・多角的に物事をとらえる。」手立て②「同じ課題の子同士でグループ編成を行い、グループで PDCA サイクルを実践する。」によって、児童 A は自分の思いを伝えるだけでなく友達からのアドバイスや考えを活動に取り入れることで活動がよりよくなることを感じ、実践に協働的に取り組むことができた。また、友達からのアドバイスをもとに活動の振り返りを繰り返すことで、活動内容をよりよいものにしていくことができた。したがって、仮説1の有効性は検証されたと考える。

### (2) 仮説2について

手立て③「ゲストティーチャーを招き、様々な環境問題の現状について学ぶ」手立て④「地域の企業の SDGs に関する取り組みを調査する」によって、児童 A は SDGs の問題を自分事としてとらえ、環境問題を主体的に考え続けることができた。さらに地域の企業の人たちの取り組みに対する思いを知り、人のために役立ちたいという思いを高めることができた。手だて⑤「「なぜ」という問題意識や「もっと」という主体性を振り返るために学びの足跡を掲示する」によって、常に自分たちが抱える課題と目標を確認することができ、活動を継続的に取り組むことができた。したがって、仮説2の有効性は検証されたと考える。

## 6 今後の課題

本研究を振り返り、以下の2点を今後の課題としてさらに研究を進めていきたい。

### (1) 協働的な学びを他教科でも生かしていきたい

本単元で培った自分一人だけでなく他者と学ぼうとする力を国語科や算数科、さらに学級活動でも生かすことができた。しかし、音楽科や図画工作科、体育科などの実技教科では、うまくできず困ったり、自分の考えだけでは解決できない問題に直面したりするとそのままにしまっている。そこで友達に相談し、友達の考えを聞いて、自分の考えに取り入れたり、自分の考えを再考したりできるような協働的な手立てを講じていき、自分の考えをより一層深め、問題解決できるような児童を育てていきたい。

### (2) 活動を家庭・地域に広げていきたい

本単元では、身近な地域で SDGs 活動に目を向けている企業に出向き、自分たちにもできる SDGs 活動がないかを考えていくことができた。しかし、地域に協力をしたいという思いを育みながらも、地域の企業の取り組みを知ることにとどまり、活動を地域全体にまで広げることができなかった。また、学校では SDGs を意識して声かけができていても、家では家族に SDGs の大切さや取り組みを伝えることができていなかった。SDGs 活動に取り組むうえで家庭や地域にどう活動を広げていくかを学級で考えたり、地域の企業や家庭と協力できる場を設定したりして活動を広げることができるようしていきたい。